

2022.12  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

とよ や  
富 薬

12号

第44巻  
No.401



ツルシキミ *Skimmia japonica* Thunb. var. *intermedia* Komatsu f. *repens* Ohwi (バラ科 *Rutaceae*)

- 生薬** インウ（茵芋） 随時葉を採取し、陽乾する。
- 成分** アルカロイド：dictamnine, skimmianine、クマリン  
配糖体：skimmin 等。
- 効能** 中国では祛風湿、止痛薬としてリウマチなどの関節痛、筋肉痛、下肢萎弱に用いたが、毒性が強く現在では用いない。殺虫作用があるところから煎じたエキスを農薬として用いた。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## 〇〇表紙について〇〇



ツルシキミの名は茎が地面を這うように広がることから名づけられました。別名ツルミヤマシキミとも言い、基本種のミヤマシキミ (*S.japonica*) の品種にあたります。千島、サハリン、北海道、本州の日本海側や四国、九州の高山帯など、多雪地帯の林床に分布し、雪の重みに耐えるため地面を這うようになったと考えられています。常緑低木で、茎の下部が地を這い、高さは50cmほどになり、葉は先端に集まり輪生状に互生します。倒披針状長楕円形で全縁、表面は濃緑色、光沢を持ち、裏面はやや緑白色を帯びます。花期は5-6月、雌雄異株で枝先に散房状の円錐花序を出し、花は白色で香があります。果期は12月から翌年の2月、赤熟した球状の果実

をつけます。

『本草綱目啓蒙』(1803)の「茵芋 ミヤマシキミ」の項目に「深山幽陰の地に生ず。小木なり。高さ一・二尺、これより長き者は皆その本地に塌し(くずれかぶさる)、末のみ直立す。今種樹家に多栽ゆ。高さ四・五寸なる者も花実を生ず。葉兩対す。形もくこく(*Ternstroemia gymnanthera*)葉に似て更に厚く蒂赤し。冬凋まず。正二月枝頭に花あり。穂をなすこと二寸許。花の大き三分、五辨、白色、萼微褐色、後円実を結ぶ。熟して赤色、大さ南天燭(*Nandina domestica*)子の如し」と、ツルシキミと思われる特徴を述べていることから、ツルシキミにもミヤマシキミと同様に「茵芋」の漢名を充てていたことが分かります。

基本種のミヤマシキミは「深山檜」の意で、山中に生え、枝葉の様子がシキミ(檜 *Illicium anisatum*)に似ることにより名づけられました。宮城県以南の太平洋側や四国、九州及び台湾に自生し、樹高が60-120cmと立ち上がる場所以外はツルシキミと目立った違いがなく、葉身や果実の大きさが僅かに大きい程度で判別は難しい。他に葉の表面の葉脈がへこんだ溝になっているウチダシミヤマシキミ (*f.yatabei*) や奄美大島以南の琉球諸島に分布するリュウキュウミヤマシキミ (*var.lutchuensis*) などが自生しています。

中国の「茵芋」は中国、台湾、ミャンマー、フィリピン、ベトナムに分布する *Skimmia reevesiana* が充てられ、ミヤマシキミと同じく常緑の低木で高さ約1mほどになります。葉はミヤマシキミより少し大形で、花期は4-5月、花は普通両性花で円錐状に頂生します。花弁は5枚で白色、香りがあり、果実は赤色で楕円形になります。『神農本草経』(2C-3C)に「茵芋、味は苦、温。川谷に生ず。五臓邪氣、心腹寒熱羸痺、瘧(マラリア)状発作有時、諸關節風湿痺(リウマチ)痛を治す」と、また陶弘景(456-536)は「好きものは彭城(江蘇省)に産す。今は近道にもあって、茎、葉の形状は莽草(シキミ)に似て細く軟い。細茎を連ねて採るものだ。方に用いることは甚だ稀だが、ただ風を療ずる酒に合わせる」と言っています。茎、葉がシキミに似ているという表現はミヤマシキミと同様です。また、有毒であることから中国でもあまり用いられなかったことも記されています。

国内では『本草和名』(918)に「茵芋 和名尔都々之、一名乎加都々之」と、ミヤマシキミの古名と思われる和名が付けられています。ミヤマシキミの名は戦国時代(1467-1576)に著された国語辞書『饅頭屋本節用集』に「太山檜」の名が見られます。『大和本草』(1709)には「深山莽草 葉はシキミに似たり、実紅し。高二・三尺に過ぎず。毒あり。煎じて菜蔬にそそげば蟲をころす。陰地を好む。挟みて活く」と深山莽草の名で殺虫剤として使うことが記されています。(村上守一 記)